

【外題】

【本文】

南總里見八犬傳第二輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第十七回 妬忌を逞して臺六蜈蚣をやしなふ
孝心を固して信乃瀑布に裸す

却説犬塚番作は、年來の志願稍遂て、男子既に出生し、母も子もいとすくよかに、産室撤るころにぞなりぬ。「さて児の名を何とか呼ば」と女房手束に譚へは、手束は且く沈吟じ、「よに子育てのなきものは、男児なれば女の子とし、女の子には男名つけて、やしなひ育れば恙なしとて、如此する人も稀には侍り。我夫婦に幸なくて、男児三人拳しかど、みな殤子にてなくなりたるに、この度も又男児なれば一トしほ心よはくなりて、想像のみせられはべり。この子が十五にならん比まで、女子にして乎は、恙あらじと思ひ侍り。その心して名け給へ」といへば番作うちほく笑み、「死生命あり、名の咎ならんや。齋翁き俗の儼事、いと信がたき筋なれども、おん身が心やりにもならば、俗に従ふもわるきにあらす。古語に長きをしのといふ。』和名録『長竿を、しのもと訓せし、則是なり。今も穂の長き竿を、しのすゞきといふぞかし。繋きすゞきとするは非ならん。わが子の命長かれ、と祝のころもて、その名を信乃と喚べき歟。昔われ美濃路にて、不思議におん身と名告あひ、信濃路にして夫婦となりぬ。しのとしなのとその声近し。越鳥は南枝に巢ひ、胡馬は北風に嘶といへり。孰かその原を忘れん。わが子もし發迹て、受領する事さへあらば、信濃の守護にもなれかし」と亦祝きのころに稱へり。この名は甚麽」と実たちて、問は手束は聞あへず、「そは」とめづたき名にはへり。富人は五十日百日と産室やしなひの賀に、酒もり遊ぶ日も尋かり。せめてこの子が名ひらぎに、籠の神に神酒献り、手習子と綿の弟子に、もの食せ給はずや」といふに番作うち點頭。「われもかくこそ思ひなれ。とく〜」といそがせは、手束は隣き媪等を備ひて、赤小豆飯に芝雜魚の羹よ臍といそがしく、目つらを掴み料理して、里の総角等を召聚會、盛ならへたる飯さへに、あからかしはの二荒臍、箸とりあぐる鬘鬘等が、顔は隠るゝ親碗に、子の久後を壽きの饗応にみな嘸りて、膝にこぼれし粒飯を、拾ひもあへず、身を起し、歡びを述て還るもあり。人より先に草履を、穿ん穿せじ、と囀しく、照てかへるも剥かりけり。

是より手束は信乃が衣裳を、女服にせざるもなく、三四才の比に及びて、鬘髪おくほどにもなれば櫛挿

せ、搔頭かんざしさへせて、「信乃しのよ〜」と喚よびしかは、しらすざるものはこの児こを、女の子ならんと思ひけり。されば暮六むろく龜篠かめささは、この為ため体ていを見聞みきく毎ごとに、掌たな拍なて冷笑あざわらひ、「凡人おとこの親おやたるもの、男児おとこを挙まるを、面目めんぼくとせざるはなし。余しかるに武士ぶしの浪人らうじんが、女めの子こを願ねがふはいかにぞや。結城ゆふき合戦あつかせんに逃にげ後あれ、背せ疵きず受うしにいたく懲こりて、軍いといふもの夢ゆめにも見みせじ、と思おぼふてかくまで戯たはけを盡つくす坎か。思おもひしにます白徒しやくた也なり」と賢まかだちて讒そしれども、合あ鎚ひ離ちすものはなく、卻なかに里人さとじん等は、信しんの愛あいして物ものをとらせ、送かた代たに抱いだとりて、その母はの手てを助たすけしかば、暮六むろく夫婦ふうふはいとゞしく、妬ねたきこと限かぎなし。又また羨うらやしく思おもへども、淫いん婦ふに石女いしむすめといふ、鄙語こつごに得漏えもすして、龜篠かめささ四十しじゅうにあまるまで、子こどもひとりもなかりしかは、夫婦ふうふ頻ひんに商量だんりやうして、只ただ管くだ養やう女にょを索もとるに、そが媒なかたずするものありて、「煉馬ねりまの家臣かしの武蔵ぶさうの煉馬ねりま氏は、豊嶋とよしま左衛門さゑもんが一族いちぞくたり。煉馬ねりま平左衛門へいざゑもんといひしは是也これなり。某甲かいつがといふもの女むすめ、今こと茲し僅づかに二才ふたさいになるあり。こはその親おやの忌いむといふ、四十二しじふにの二にッ子こなれば、生涯せいざい不通ふつうの約束やくそくにて、永樂えいらく錢せん七貫文しちくわんもんを贖ひたし、家系けい直ちきかたもあらは、養女やうにょに遣つかすべしといへり。件あの女この子こは生えれ得えて、目鼻めはなだち愛あいらしてく痘瘡むがさもこの春はるの比ひいとかるやかにしてはてにければ、意まに疵きずなき玉たまになん。とばかりならで去歲こぞの春はる、正月むつきのはじめに生うれしかは、年としよとかいふ二才ふたさい児こ也なり。かゝれば乳母にちぼなしといふとも、孚へみかたきことはあらじ、養やしひ給たまへ」と勸すすめば、暮六かめろく龜篠かめささは笑片ええかた向むかて、共ともに小膝こひざの進すすむを覺おぼえ、聞果きこて目めを注つしく、「鹽あまが塩しほ焼やくからき世よに、子この贖ひたして永樂えいらく錢せん七貫文しちくわんもんは些少せうせうにあらず。目今たい和殿わいとんがも語かた、譚たんなきものならば、素もとより望ぞむ所ところなり。とくこしらへて見給みたまへ」と夫婦ふうふ齊いっせい一應いっおうしかば、件あの男おとこはこゝる得果えくたて、遽いしく出でてゆき。かくて五六日ごを経ある程ほどに、その終しゆう竟けいに整ととしかば、媒なかたの男おとこして、その子この親おやと、暮六むろくと證文あかひのみをとりかはし、彼かの七貫文しちくわんもんも共ともに、女めの子こを大塚おほづかへ贈おくりにければ、龜篠かめささやがて抱いだきとりて、まじその顔かほをうち熟視ながめ、又指またより蹠うらまで、泣なきも管くだはす引伸ひきのじ、うすかへしうんとくを見て、駭然おどろとうち笑わらひ、「三十二さんじふに相捕あひらひしとは、何処いをさしていふにやしらねむ、意まにこの子こは掘出ほりだし物ものなり。これ見給みたまへ」とさしよすれば、暮六むろくいよ〜憑たのじてきて、「よき子こぞ、勿泣なく物ものとらせむ」と袂たてへ右手みぎをさし入れて、とり出す果は子の花はなもみち、美みならぬ親おやとしらぬ子こも、有あ繫あ口くちには孝行けうかうにて、朝あ四し暮ぼ三さんの猿鏡さるかがみ、銜くはたるごとく泣なみけり。現げん頑がんなるものは、その偏執へんしつの心こころもて、わが物ものとだに名なをつくれれば、傍かたはらいたく愛あいに溺おぼれて、他の嘲あざわらをよしなきに、況ましてて暮六むろく龜篠かめささは、妬ねたしと思おもふ番作ばんさく夫婦ふうふが、鼻はなをひしがんとのみ思おもひしかば、件あの養女やうにょを濟路せいじよと名なをつけて、分に過あたる綺羅きらを飾かざせ、是処ここの遊山ゆうざん、彼処かしこの物語ものがたりとて、下女げにょに抱いだせ、小廝こまに先まを追おせし、四十しじゅう老女らうにょの龜篠かめさささへ、鎌倉かまくら様の衣かほを襲かねて、月つきの中なかにはいく遍たひとなく、出いあるぎに日ひを費つて、錢せんを費つて、嘲あざわらを思おもはず。加そ以もわが女むすめの、髮かみ置お紐ひも解ひれとかいふ年としには、身た十じゅう倍ばいの美服びふくを被かせて、健すなるをこの肩かたのほ

し、城埴詣を假托に、彼此人に弄賣すに、よに阿諛の言葉巧に、渠を誉るものあれば、家裏の飴、惜氣もなく、みなその人に饋りしかは、寔に甘き親といふめり。
かくて濱路が生育隨に、やゝ東西をしる比より、糸竹の技に師を擇みて、朝より夕まで、うち囃し、舞躍して、絶て四隣を憚らず、よろづ化に養ひたつるに、生得たる容止の、人なみなみに立まされば、鶯の子に鷹ありとて、女兒を誉る陰言を、聞く二親はほく笑て、われを嘲るよしを暁らず、「位高く、富さかえ、世に威徳ある婿ならで、えこそは招らじ」と誇りけり。

案下某生再説、犬塚番作が一子信乃は、はや九才になりしかは、骨逞しく膂力あり。現尋常なる人の子が、年十一二になるものより、身の文一技高かるに、なほ女服被せられて、雀小弓に紙鷲、印地打竹馬など、よろづの遊びもあらじしきまで、おのづから武藝を好めは、番作ますゝ鍾愛して、朝には、里の総角とゞもに、手習させ、夕には儒書軍記の句諺を授、又あるときは試みに、劍術拳法を教るに、素より好む道なれば、その技の進む事、親尚しほしほ舌を掉て、すゑたのもしく思ひけり。

父はかくても母手束は、わが子のいとも伶俐に、おのづからなる孝心の、拳動に顯れて、親さへ人の稱譽るまでに、文の道、武の藝、年には倍てその器に稱入は、もし短命にあらすや、と彼を思ひ此を思ふに、とにかく心安からねば、夫を諫め、子を禁め、「習ひ字はわるきにあらねど、綰入かたにせよ」といふ。さはれ信乃が心さま、よの童子とはうらつゝ入て、母の目影を匿びても、竹刀を手にとらざる日もなく、馬にさへ騎ならはんと、思ふ心のつきたれども、田舎は小荷駄のみにして、借馬などいふものはあらず。

余るに信乃が生るゝ比、母親手束が瀧の川なる、岩屋詣のかへるさに、將て來つる狗の子は、信乃とゞもに大きくなりて、今茲は既に十才なり。この狗、背は墨より黒く、腹と四足は雪より白くて、馬に所云馳なれば、その名をやがて四白とも、又与四郎とも喚ぶ程に、年來信乃によく狎て、打擲れても怒ることなく、手に屬その意に隨ふにぞ、信乃は件の与四郎に、素鞍をかけてうち乗れば、狗は主のこころを得て、足掻を早めて幾返りかす。誰教ねどもその騎座、鞍さばきの御法に稱ふを、見るもの思はず立て、技と姿の似げなきに、腹をかゝえて笑ふもあり。又この童子が為体、平人にはあらじとて、賞嘆するも尋かりけり。現五人にあらざれば、祓儀と真主とをしることなし。信乃が女の子の打扮にて、武勇る技のみすなれば、里の総角等は指し睥みて、「陰囊なて」とぞ囃たる。かくても信乃は物とも思はず、「彼奴等は士民の子なり。遊び敵になるものならぬに、論は無益」とわれから辟て、一々たびも争はず。しかはあれ

どまわが身ひとり、「よのわらへんとは異にして、女の子めきたる衣をのみ、被せらるゝはいかにぞや」と
よに訝しく思ふものから、事に紛れて親には問はず。襦袢のうちより肌膚につけ、

【挿絵】「思ひくまの人はなか／＼なきものをあはれに犬のぬしをしりぬる」「犬塚しの」「龜笹」「はま路」
被馴し女服なれば、愧る氣色はなかりけり。

さる程に、今茲秋のころよりして、手束は心地例ならず、病の床に臥しより、鍼灸薬餌の驗なく、冬の
はじめに至ては、日に／＼よわるばかりなれば、番作はいと／＼し／＼、眉うちひらくよしもなく、夜とて安
くは目睡ず。信乃は又あさな／＼、醫師許往還しつゝ、湯液をすゝめ、膏を捺り、四表八表の物かたりして、
母の徒然を慰るに、思はず涙目に盈て、やるかたなきを見る母は、胃ふたがりて泣兒を、隠すよしなく
鳩尾を、拊て痞に紛らかす。親子迭に思ふ事、いはねどしるき孝行慈愛、こころぞ想像れたる。

かくてその詰回、信乃は藥劑とりにとて、いそしく出てゆきし後、番作は妻の枕方にて、小鍋に粥の
塩加減して、半開きし扇の風に、火を起させて居たりしかば、手束ははつかに頭を擡、常にはあらぬわ
が良人の、火打水汲しどけなく、籠働きし給ふこと、心苦しき限りに侍り。加之十にも足らぬ、信乃
が頃日大人しく、親につかへて夜の目あはせず、かくまでに憑しき、良人とわが子の介抱を、受ても卒に
ゆく道の、別と思ひ侍るかし。抑わらはが此度の病著、ゆゑありぬべきことになん。素より信乃は祈子
にて、云云の奇瑞あり。かくて拳しひとり子なれども、年に倍たる智は長て、親はつかしきものに侍れ
は、瘍子でなくせし兄等に懲て、もし短命にあらずやと思ひしはきのふけふならず。彼が定業脱れかた
くて、生育ぬものならば、母が命を換させ給へ、と瀧の川なる岩屋敷、神に佛に年来より、願望竟に空か
らで、信乃は襦袢の中よりして、疔氣もあらず風ひかす、軽き疱疹の神送り、振子の疫を病果ても、男児
には怪我ありといふ、七才の癩諭させて、今茲わらはが身まからは、わが子の久後念願成就、かはる命
は惜からで、悲しきは只死別れ。ひとりは缺る垂乳女の、母はなぐとも參々たに、よにましまさば光もて、
何暗からず生育なん。久くもをらぬ娑婆と思へば、可惜財を費して、湯薬たへんは無益に侍り。うち捨
ておき給ひね「といひあへず涙ぞしくみて、呼吸細る覺期の言の葉、脆きは袖の露霜に、よわり果たる秋
の蝶、片羽攪るゝ思ひなる、番作しほ／＼嘆息して」「異なることを聞くものかな。わが子の命にかはらんと
て、かはらぬゝものなほ、世に子を喪ふは親はあらで。さる慰ひより病もすれ。よしなく物を思はかより、
薬を服、粥をも啜りて、気長く保養し給へ」と理り盡して諭けけり。

冬の日なれば短くて、はや日のころになりしかば、生平にもあらで信乃はかへらす。「渠路草を食ものに

あらず。いかにしつらん」と子を思ふ親の心はおちつかず。番作は外面へ、出て見んとて障子を開けは、思ひがけなく縁類に、薬劑のかよひ管はあり。こは訝しと紐ときて、蓋かいとれは薬劑もあり。さもこそと片類に笑みつゝ、件の管を携て、遽しく裡面に入り、手束よ、薬劑は彼処にあり。何の程にか信乃は還りて、氣鬱を散しに出にけん。意に童ころぞかし。おん身が病者の初より、おのが事には苟にも外に立こともなかりしに、いかばかりおもしろき、もの見かけて款還りたる、よしをも告す又出たり」といふに手束は稍おちゐて、「たまゝの事なるに、必な叱り給ひそ。還るに程ははへらじ」といひつゝもその顔見ねば、片心にぞかゝりける。

かくてはや、未のあゆみ過にけん、晷斜になるころまで、俟ども信乃は還らず。「よしや遊に惚たりとも、餓なほ興も竭へきに、物をも食はで何処にをる、こころ得かたき事也」と父向いへは母はなほ重き頭をいく遍か、拳て瞻望る外面に、板金剛の音すれば、それかとぞ思ふ、誑されて、浪速の浦に刈といふ、人のあしさへ恨みけり。妻が嘲てば番作も、立て見居て見、まち不楽て、思はずも嘆息し、「わが足、舊のことくならば、只一走り走廻りて、かならず察て將て還んに、日景短き小六月、夕陽を瞻つ杖に携て、何地までゆかるべき。然とて暮なはいよく便なし。菅菰までも」と一刀を、挿て竹杖、衝ころみ、はや外面に出んとす。

浩処に、番作が背門の前面なる莊客に、糠助と喚るゝもの、右手に一條の釣竿と、一箇の魚籠を携て、左手に信乃を扶掖き、遽しく詣來つゝ今外面へ出んとする、番作と面をあはして、呵々とうち笑ひ、「犬塚氏坂。其処にゐませり。秋の稼もしはてたる、骨休めにとわれとわが、一チ日の暇を給はり、けふは未明にうかれ出て、神谷川に雑魚釣暮し、瀧の川をかへり來れば、こゝなる息子が不動の瀧に、水垢離執て、身は冷徹り、息も絶へき形勢を、見つけし時は臆潰れて、周章き引出し、そがまゝ坊へ將てゆきつ。篝火に爇め、薬を服せ、法師們共侶に、勸ること半响許、はじめてわれに復りしかば、湯飯賜ふて服を肥させ、縁故を尋れば、母の大病平愈の祈禱に、水垢離をとりしといふ。十にも足らぬ童には、儻稀なる大孝行、法師們も感心せられて、求ざれども當病平愈の、神符洗米を給はりぬ。件の瀧は寺へ遠くて、わが外に人しらざりき。寔に危き事なりし。かくまで賢き子也、親なり、佛神見はなち給はんや。母御は本復疑ひなし。いざ子たからを受とり給へ。暮かゝればはや返る也。病人によくこころ得てよ。要あらば背戸口から、竹螺鳴して呼給へ。和子よ、翌はあそびに來よ。この魚炙りて食せんに」とおのがいふ事いひ誇り、人の挨拶聞果す裡面にも入らでかへりけり。

さては、とばかり番作は、わが子の肩を杖に換、陟框を足引の山道踏たるこゝちして、そがまゝ奥へ
しらすれば、手束も緯の趣を、洩蘭からに病苦を忘れて、わが子をほとり近く侍らう、「信乃よくものを
こゝる得よ。孝行つくすも程あるもの也。身を詰めて怪我あらは、親の歎きはいかなるべき。かくては孝
が不孝ぞかし。親いとをしと思ふ子の為には、祈らでも神は守り給はん。危き所行をし給ふな」と諭せば
信乃は酸鼻、「言ふ所こゝる得侍り。今朝醫師許赴きて、薬劑給はりて還りし折、家尊に家母の物かたり、
信乃が命の長かれ、と勿体なくもわが母は、命を贖に神明へ、祈らせ給ひし験にや、長き病著に臥給ふ、
と言はせしを竊聞て、哀しきこと限り侍らず。涙に濡るゝ片袖を、泣声たてじと噬締て、縁頼についゐた
りしが、親の願望驗あらば、わがなごとも験ありなん。いかでこの身を贖にして、母の命にかはらん
と、思ひ決めつ。もてかへりし、薬劑を其処に密と措て、年来母御の信じ給ふ、瀧の川に走りゆき、岩屋
の神に思ふ事、くり返したる瀧の糸、心強くも身を撲し、一トたびは死侍りけん、そのゝちの事しらす侍
り。さてあるべきにゆくりなく、糠助男に妨せられて、活て還るは願望を、神は受させ給はぬにや。い
と朽をしく、かなしく侍り」といひかけ目をおし拭へば、手束はよ々と泣沈み、「よに子をもため親はなけ
れど、けふ死するともわが身ばかり、幸あるものはなきぞとよ。八九才の稚こゝるに、賢しや親にかはら
ん、と祈る誠を神明の、受給へばこそ瀧壺の、水屑とならで還りけめ。かくまでに命運つよき、わが子の
うへを見るからに、久後さへに憑しく、歡しさに涙のみ、はふれおちて禁めがたし。母がおん身にかはら
んとて、祈りしは惑ひなり、験あるべき事ならぬに、かへすゝもよしもなき、願たてなし給ひそ」と涙
の際に諭しけり。

番作は何ともいはず、つくぐと聞て形を改め、「信乃よ、あはれわが子なり。その至孝にあらざりせ
ば、慈母の惑ひを解よしあらんや。周公金縢の書の如きは、神に祝て成王の病にかはらん、と願給へり。
儼は當時の眞言歌。亦是至誠至感の徳のみ。さはれ物の命数は、人のよくする所にあらず。もし果してこ
れをよくせば、忠臣孝子がかはらずして、孰か君父を病床に覆ふべき。さはれそのかはらん、と願ふもの
は、誠の至れる所なり。遂に感應ありといふとも、命数は増かたからん。汝幼弱にしてその才智、大人に
ますことあり。既に道理をしるべきも歌。言よく小耳にとゞめよ」と説示す語の次に、祖父匠作が忠死
の形勢、結城落城の後、春王安王両公達の、最期の為体を物かたり、又母手束が二子を祈て、瀧の川の
廟よりかへるさに、神女を面あたりに拝み奉り、授け給ふ玉をえとらで、与四郎若世を將て還りしより、
いく程もなく有身て、信乃が生れしことさへに、その夜とゞもに説明す、言葉に注をくだしていふやう、

「吉事には禎祥あり、凶事には妖孽あり。必し手束が孕むべき、時至りしかば奇特を見たり。されば神女は辨才天坎、又山媛などいふものか。或は狐貉の所為坎。そのよしをしらずして、汝を神の授け給ふ、と我も思ひ、人にも告なば、愚人の夢物語に似て、世の胡慮にならんのみ。只智あり勇ある子を、孕むべき祥也けり、とこゝろに秘して母さへに、口を禁てけふまでは、さてぞ汝に告ざりし。これらも理義をわきまへよ」と叮嚀に教諭せば、信乃は小耳を側立て、聞こと毎に感激し、手束も霎時病苦を忘れて、興あることに思ひけり。

當下信乃は思ふやう、わが母神女の授け給ふ、玉をえとらで、狗をのみ、携て還り給ひし故坎、吾侪に羞なけれども、母御は生平に持病多くて、竟に危窮に及び給へり。しからんには彼玉を、再びこゝに索獲ば、本復し給ふこともありなん。ともかくもしてその玉を、得まほしとのみ思ひしかば、更に佛神に祈請して、望をこゝんにかくれども、見し事もなき玉の再び出へきまよもなく、母の病は日にまして、十日あまりを経る程に、けふを限りと思ひけん、手束は細やかに遺言しつゝ、應仁二年十月下旬、享年こゝに四十二才、その朝霜と共侶に、睡るが如く生氣絶けり。番作が歎きはさら也。信乃は地に伏、天にあぐがれ、紅淚袖に溢れつゝ、哽咽り転輒び、声をえたくす泣しかば、隣き黨集りて、或は信乃を諫め激し、或は番作に力を戮して、後の事を相謀り、次の日の黄昏に、卒に棺を擲出して、番作が母の墓の側にぞ葬りける。

この日も信乃は衣裳を更す、綿をもて面頬を包み、すべて女の子の打扮して、母の棺を送りしかば、見るもの笑ひを忍びあへず、ゆきしより還るまで、指し密語さるものなし。信乃はこの好景に、日來はとまれかくもあれ、人の愁ひをたのしげに、われを嘲る白徒かなと思へども色にも出さず。母の中陰果て後、はじめて父に云々と、送葬の日の事を告、「抑吾侪は男子なるに、なごて女の子にせらるゝやらん。吾侪がうへは厭ふに足らず。親さへに譏らるゝは、朽をしき事に侍り。その故あらはしまほし、しらせ給へ」と生平にはあらで、怒氣を合て問しかば、番作はうち笑ひ、「そぞ憤る事やはある。さらば先そのよしをしらせん。汝には兄三人あり。襦袢の中にみな死たり。かくて汝を拳しかば、母はこの子も育たずに、喪もやすべき、心もとなし。俗の慣弊にしたがひて、女の子にして乎まば、恙あらじ、と婦人の愚癡も、惑ひを釋へき證迹を獲されは、われもその意に任じつゝ、則信乃と名つけしは、如此々々の義を取れり。かくは婦人の忌諱を信たる、儼事に似たれども、心なくて許さんや。むかしも今の男児は、十五歳まで女の子に比へて、額髪を剃落さず、袂長き衣を被て、紅裏さへに許されしは、女の子に比へし證據也。又櫛笄は婦女のみならず、或は冠を聳るため、或は烏帽子の尻を昂くせん為、むかしは男子も挿たる也。余る

をいと醜みにくしとて、これを笑わらふはしらずして、儼しゆくと忽こつとが渾沌こんとん氏しを、敗そこなひたる惑まどひにおなじ。人ひといつまでか
幼稚をさなかるべき。汝なんぢもその年とし二八にじゅうはちに至いたらば、當まさに一個いっごの男子なんしなるべし。是これを笑わらふは知らざるなり。彼かれを怒いか
はその智ち足たらず。うち捨ておきな」といふ、只ただ一言ひとことに諭さとされて、信し乃のは忽たちまち地ち疑うたがひ解とけ、これに就つき彼かれにつけ
て、なき母親はやおやの慈いつくしみ、かくまでにありける歎か、と思おもへば哀かなしく慕したほしく、泣な顔がほかしく退しりぞきぬ。